令和三年度

勿来高だより

第十二号　令和四年弥生十七日発行

卒業式

卒業生四十八名

三月一日（火）本校体育館にて、令和三年度卒業式が挙行され、四十八名の卒業生が本校を巣立ちました。

コロナ感染症に伴う県内の対応がレベル３ということで、来賓席そのものを設けず、ご祝辞を紙面にてご披露申し上げる形となりました。また、在校生を入れず、保護者の方にも家族代表一名のご列席とさせて頂くなど、制限を伴う式となりましたが、卒業生代表が涙ながらに感謝の答辞を述べるなど、厳かな中にも心温まる式となりました。

写真は，代表として証書を受け取る中川凜音さんと答辞を述べる蛭田海虎さんです。立派な青年に成長しました。

校長式辞（抄）

（略）

さて、先週末、ウクライナにロシアが侵攻するという出来事がありました。ミサイルが頭上を飛び爆発する様子や包帯を巻いた老婆の姿、街から避難しようとする市民の車列など、平和な日常がいとも簡単に奪われ破壊されていく現実に、皆さんは何を感じていますか。

次に、十一年前を思い出してみましょう。皆さんが小学校一年生も終わろうとする三月、東日本大震災・原発事故がありました。予定されていた終業式や始業式もなくなり、毎日楽しみにしていた校庭での活動もなくなり、平穏な日常がいとも簡単に失われていった日々に、皆さんは何を感じていましたか。

最後に、勿来高校で過ごした日々を思い出してみましょう。とくに、コロナ禍と言われた二年間を。突然の休校に始まり、常にマスクをする日々、文化祭も思うようにできず、修学旅行は中止となりました。高校生として当たり前の日常と思っていたものが日常ではなくなる日々に、皆さんは何を感じましたか。

こうして考えてみると、平和や平穏、当たり前といわれるものが、どれだけ奪われやすく、脆く、失われやすいものかを感じ取ることができるでしょう。

と、同時に、勿来高校で過ごした皆さんの日々は、脆く失われていく日常の中で何もせずに過ごしてきたわけではないはずです。

たとえば、進路活動では自ら進んで面接指導を望み合格・内定を勝ち取り、たとえば、東京旅行では友人と協力し計画を練り成功させ、たとえば、

クラス対抗リレーでは、雨の中校庭を整備し、中止の予想を覆して三日目実施を手にしました。

つまり、皆さんは、失われていく当たり前の日常の中でも、自ら考え立ち向かい、自らすべきことを進んで行い、そして結果を手にするという経験を勿来高校で学び、積み重ねてきたと言えるのです。

平和は奪われやすく、平穏は脆く、当たり前は失われやすい。

それでも、自ら考え自ら行うことで当たり前に生きようとし、自ら考え自ら行うことで平穏を望み、自ら考え自ら行うことで平和を求め続ける。それこそが、勿来高校で学び，勿来高校を卒業する皆さんに、地域が、日本が、世界が期待する力であり、皆さん一人一人が必ず持っている力です。

自分にはその力があることを胸に刻み、考え行動できる一人の人間として、千変万化する世の中をしっかりと生き抜いてください。

（略）

こうして、平和のうちに卒業を祝うことのできる今に感謝するとともに、自ら考え行動する皆さんが、幸多き人生を歩まれんことを心から祈りつつ、式辞といたします。

年度替わりの風物詩

卒業式に先立つ数日前、校長室ではAO入試に臨む進学希望者の最後の面接練習が行われました。

県立高校の卒業式は、三月一日なので、三月中に行われる大学や専門学校の入試は卒業後に受験ということになります。卒業しても気が抜けませんね。

写真の生徒の結果は、無事「合格」でした。卒業しているので、報告に来校するときは「私服」で現れます。こんなことも三月、年度替わりの風物詩ですね。

心に残る一言

校長室の掃除担当は二年生の伊藤さんと田子さんです。三年生が卒業してしまったので、臨時割り当てとなり二人で一生懸命掃除をしています。

三月は、卒業式や入試業務などで、自宅学習となる日も多く、ある日は五日ぶりの登校となりました。久々に校長室に顔を出した二人。

私「おおお、久しぶりだなあ、毎日何やってたの」

二人「もう、何もやることがなくなっちゃって、どうしていいかわからない感じでした（笑）」

私「でも、家でゆっくりできたんだから」

二人「いや、学校に来る方が楽しくていいです（きっぱり）」

聞きましたか、いや、読みましたか。「学校に来る方が楽しくていい」ですって！もう、二重波線引いちゃおう！

校長のつぶやき

令和三年度もあと二週間弱ですね。地域の皆様に支えられてこその勿来高校です。今後ともよろしくお願いします。

（本紙中のイラストは「いらすとや」WEBよりお借りしています。）